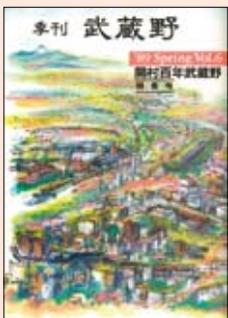


# 「季刊むさしの」の歩み

「季刊むさしの」は本号で100号を迎えました。市の施策や事業を、背景、経過、課題を含めて、掘り下げて分かりやすく紹介し、武蔵野を愛する市民にとって市政との架け橋となることを目指し、昭和63年1月25日に創刊されました。

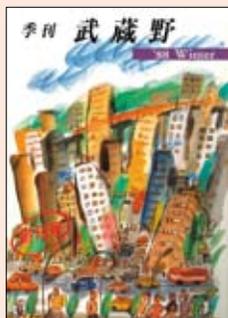
## 1989年 春号 60号

元号が昭和から平成へと変わり、新しい時代の幕開けとなったこの年は、武蔵野市にとっても、開村百年となる記念の年でした。明治22年に吉祥寺、西窪、関前、境の旧4カ村などが合併して武蔵野村として産声をあげました。特集「開村百年 武蔵野」では、100年前の武蔵野市の様子を当時のデータからひも解くとともに、市の歴史を物語る文化財を紹介しました。



## 1988年 冬号 創刊号

昭和63年1月創刊。当時のタイトルは「季刊武蔵野」。表紙を含め全40頁。12頁がカラーでそれ以外は白黒でした。表紙イラストは、本号のイラストも描いている久世アキ子さん。当時の吉祥寺の街並みが描かれています。特集では「紀行・豊科峭寒の安雲野を行く」と題して、武蔵野市と姉妹都市であった長野県豊科町を紹介しました。



## 1997年 秋号 40号

平成9年は、武蔵野市が誕生して50年の節目の年でした。昭和22年11月3日に誕生した武蔵野市。当時の人口は、約6万3千人。現在の人口約13万8千人と比べるとその数は約半数でした。紙面では、特集「暮らしから見た武蔵野50年」と題して、市の50年の歴史を振り返りました。



## 1999年 冬号 49号

この年の秋号からタイトルを「季刊むさしの」に変更。この号では、来る西暦2000年を記念して『「吉祥寺、20世紀の記憶」この100年を振り返る。』と題した特集を組みました。特集の中では、昭和9年に開通した井の頭線や、駅の開通とともに変化していた吉祥寺の歴史を紹介しました。



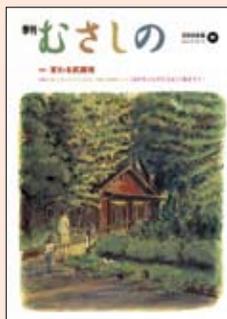
## 2010年 夏号 91号

この号から紙面がオールカラーに。特集では、高齢者や障害者にとっても利用しやすい交通システムを目指した武蔵野市の道づくりの取り組みを紹介。自転車の路上駐輪場の解消に向けた大型有料駐輪場の誕生について取り上げ、歩いて楽しい道づくりを紹介しました。



## 2006年 秋号 76号

「変わる武蔵境」と題し、鉄道連続立体交差事業が進む武蔵境を特集しました。武蔵境駅が誕生した明治22年当時から現在に至るまでの歴史を振り返り、まちがどのように整備されていったのかを振り返りました。「武蔵境駅舎・広場・街づくり協議会」の活動も紹介し、まちづくりを市民が支える様子を伝えています。



# 100号に寄せて

渋谷花織  
むさしのスタイル



木」と、名前がついている木も  
あります。このまちに住む人  
が本当に木を大切にしている  
ことがよく分かりました。

また、まち中で、人に道や  
土地についての質問をする  
と、皆さん、とても親切に教え  
てくれて本当に安心して歩  
けるまちだと感じました。

「季刊むさしの」100号  
おめでとうございます！私  
が初めて「季刊むさしの」  
に描かせていただいたのは、  
2000年夏号(51号)でし  
た。当時の私は、吉祥寺に数  
回行ったことがある程度で、  
武蔵野市を歩くのはほとん  
ど初めてでした。実際に歩い  
てみると、いたる所に大木が  
あることに驚きました。街  
路樹は太い幹のサクラや、天  
高く伸びるケヤキ、小さな  
公園に大きな木。まるでこの  
木のために公園を作りまし  
た……といった趣です。そし  
て庭木も大木！「〇〇家の

その後、武蔵野市の観光  
推進計画の策定に参加させ  
ていただき、都市観光という  
面で武蔵野市を見ることが  
できたのは、とても勉強にな  
りました。平地で歩きやす  
い。木々をたどって飽きるこ  
となく歩ける。まち中にコ  
ミュニティセンターがあり、散  
歩中の住宅地を歩いているも  
トイレ休憩ができる。そして  
なにより、人がやさしい！本  
当にこれほどお散歩にぴった  
りなまちはないなとしみじ  
み思いつつ、2012年に至  
ります。

これからも「武蔵野市ファ  
ンの来街者」目線で、武蔵野  
市の素敵な所をたくさん見  
付けていきたいです。

## 大須賀一雄 武蔵野スケッチ物語



私は武蔵  
野市を愛して  
やまない家族  
と45年間、市  
内に住んでい  
る。現在は水  
彩画家とし  
て、JR東日

本の趣味の会などのスケッチ講師をしている。  
実は、私は画家になる前は、JR東日本の  
国際部で、海外からやってくる鉄道視察者の  
ガイド兼通訳の仕事をしていた。視察者の  
多くは、鉄道関係者がほとんどであったが、  
中には、かの有名なオードリー・ヘップバーン  
などでもいて、貴重な体験をさせてもらったと  
思っている。

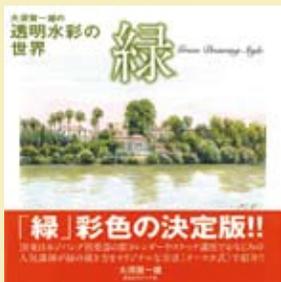
ところで、私はこれまで海外の国々を53カ  
国回ってきた。旅行の主な目的は、旅先での  
スケッチなので、旅行先は題材の豊富なヨー  
ロッパが圧倒的に多い。これまでのスケッチ旅  
行で、印象に残っている経験を二つ紹介させて  
いただきたいと思います。

それは、約10年前のこと、歴史的に有名な  
英国のバースで、教会の絵を描いたことがあつ  
た。絵がほぼ完成に近づいたころ、私の背後  
で作品を見ていた地元紳士が、突然私の  
そばにやってきて、私に向かって右手の親指  
をぐっと立てて一言、「ギフト！」と言って、立

ち去って行った。このことは、今でも鮮明に残  
る、うれしい思い出の二コマである(この場合  
のギフトの意味は、「神からの賜物」、転じて  
「お上手ですね」という意味である)。  
思い起こせば私が初めて「武蔵野スケッチ  
物語」の絵と文を担当させていただいたのも  
約10年前、2001年の春号のことだった。  
縁があつて、このように長年担当させていた  
だいているのは、読者の皆様のおかげと心よ  
り感謝している。

## PRESENT

本誌発刊100号を記念して、大須賀一雄さんから、  
海外のスケッチをまとめた「透明水彩の世界・ヨー  
ロッパ編」と武蔵野市近辺の風景画も多く登場し  
ている水彩画の描き方の本「緑」を、それぞ  
れ5冊ずつプレゼントします。大須賀さんの直筆  
サイン入りです。



※ご応募については本誌折り込  
みはがきをご覧ください。